

# 算命学中庸

## 【初年】 4 6 回目

4 6 回目の授業はこのページからです。

授業科目           【十二大従星力学】 ⑥

・【初年】 4 6 回目【十二大従星力学⑥】 01

□ 十二大従星力学（じゅうにだいじゅうせいりきがく） ⑥ 回目

⇒ 天極星（てんきょくせい）

天極星 — 死人

天極星はあの世とこの世の中間の時代と、45 回目に出てきましたが、中間の時代とはどのような時代なのか

ということが理解しにくい部分かとおもいます。

そこで中間の時代はどのような時代なのか、つぎのように分けて考えます。

天 極 星	〔	肉体 ⇒ 無
		精神 ⇒ 有

天極星を肉体と精神とに分けました。

『天極星』の時代というのは、此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>で生命活動をしていた肉体は死にましたが、精神は肉体から解き放たれた霊魂として、宇宙空間をさま迷っている時代です。

肉体は死んで此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>に存在しませんから（肉体が強い）（肉体が弱い）肉体については問えません。

精神だけが残っています。

これが天極星の時代の特徴になります。

現実としての肉体は無く、精神だけの状態ですから、天極星をもつ人は精神的に強い人になるはずです。

精神分野に向いているはずです。

**精神的に強い、精神的分野に向いている。**

このように考えることができますが、もう少し掘り下げます。

肉体は無く、魂が解き放たれて〔空間をさ迷う〕時代の特徴はなにかと考えます。

〔たとえば〕此の世に置き換えて考えます。

私たちが「どこかへ行きたいなあ」と、心で想ったとします。

どこか旅行に行きたい、あるいは、家に早く帰りたい。その場所はどこでも構いません。

「いまそこへ行きたい」とおもっても、すぐその場所へ行きつくことはできません。

それは何故でしょう？

〔たとえば〕ロスアンゼルスへ行きたい。いますぐ行きたいのですが——国際線の空港まで行って、飛行機に搭乗して、10何時間ほど機内に閉じ込められます。やっとロスアンゼルス国際空港に到着します。

日本を発着してロスに着くのは、日本時間でいえば、明日になってしまいます。

成田国際空港を12日の午後に離陸すれば、ロスの空港へ到着するのは、おなじ12日の早朝でしょう。

日本からロスへ行くには、リムジンバスか成田エクスプレスに乗って成田まで行き、空港のカウンターで搭乗手続きをして荷物を預け、移民局でパスポートの確認を受け、それから搭乗口の待合所まで行って、搭乗できるまで待機して、また搭乗券の確認をされて、やっと機内に入れるわけです。

機内に入っても、飛行機が飛び立つ時刻まで指定された座席で待ちます。

そのことを考えると「いますぐ行きたい」そのおもいは消えてしまうこともあるでしょう。

「いま行きたい」そのおもいは、すぐ行きたいのです。どんなに急いでも、飛行機に搭乗しても、ロスまで飛ぶには9～10時間はかかります。

今日は疲れた。家に早く帰りたいと想っても、すぐ家に着いて横になれません。駅まで歩いて何十分か電車に乗るか、車を運転して行くか、タクシーを利用するかです。家で横になれるのは、数十分後、1時間後、あるいはそれ以上の時間を必要とするでしょう。

これって何故でしょう？

それは距離があるからですか——？

距離もそうですが、人間の肉体は貨物輸送とおなじです。すぐ到達できないのは肉体があるからです。

ロスに行くには、いくつかの輸送手段をつかって肉体を運ぶ必要があります。

肉体があるがゆえに、人間は何をするにも制限を受けます。

でも想像力がありますから、目を瞑<sup>つむ</sup>って、脳裏にその情景を描くことはできます。

サンタモニカの海岸に立ち、真っ赤な太陽が水平線に沈もうとしている姿を描き想像することは可能です。

可能ですが、実際にサンタモニカの海岸に行ったことがあるとか、あるいは、太陽が海岸線に沈む光景を写真とかで見ないと脳裏に浮かんでこないでしょう。

あるいは、会社にいながら、自宅のソファーにからだを横たえている姿を思い浮かべることは可能です。

肉体が無くて精神だけであれば、すぐにそこへ移動することは可能だといえます。

人間が死んで、死後49日のあいだに魂たましいが七曜しちようを七回訪れます。七曜 ⇒ 「十二大従星力学⑤」53ページ

今日は木性、明日は火性を訪れて、あさっては太陽を訪れるとか……霊魂なら可能であるという考え方をしているのです。

肉体は死んでも、肉体から離脱した霊魂は、行こうとおもえば……瞬間的に行けるのです。

地球を含めた5惑星のなかで、地球から1番遠い惑星は木性です。そこへ瞬時に行けると考えています。

念ねんの速さは、光速こうそく（1秒間に30万キロメートル）よりも速いとされています。

「一念三千いちねんさんぜん」という言葉がありますが、その意味するところは、人の心はどこへでも通ずるということです。それも光速1秒間に30万kmよりも速いです。

皆様がなにかを想う・なにかを思うのは自由です。

その想いを描けば、瞬時にして、その世界に到達することができます。それが天極星の特徴になります。

自由な発想ができる

天極星は自由な発想ができます。

〔たとえば〕ふつうの人が、なにか仕事をやるにしても、あるいは、趣味でなにかをやろうしても、肉体という現実的な制限があるために不可能なことであっても、精神で自由に描くことができます。

〔天極星〕はそういう質を備えていますので、ふつうの常識にとらわれることなく、自由な発想ができるという特徴があります。

**常識にとらわれない。**

常識にとらわれないものの考え方・発想が出来ます。

パッと閃いたら、パツとなにか解か<sup>わか</sup>ってしまう。というような感の鋭<sup>するど</sup>さをもっている星です。

**感性が鋭い**



**靈感**

ふつうの人がものを考えるのに、理論立てて順番に、こうだから、ああだから、こうなつてと考えていく、その時間を超<sup>ちょうえつ</sup>越できますし、距離も超越できます。途中の経過がなくてもパツと答えがわかったりします。

そういう感性の鋭敏えいびんさをつけていますので、それがさらに強くなれば靈感れいかんになります。

天極星は『十二大従星』のなかでは、最も感応かんのうが強い星です。

参考：感応〔心に感じ反応すること〕

しかし、天極星をもっているというだけでは、靈感にはならないのです。

感の働きのよい人にはなりますが、靈感にまで至いたれないのです。

靈感を発揮するためには、肉体感覚を無にしないといけないと、算命学は考えています。

肉体がそなえている感覚を無に出来ると、見事な靈感を発揮できます。

ただし、天胡星てんゆめせい正式名称は（てんこせい）のところにでてきましたが「禅天魔ぜんてんま」の世界です。

〔たとえば〕真冬に山に入って、滝に打たれる滝行は冷たく、痛いです。ふつうはイヤですよ。

ところが、行ぎょうに集中すれば、滝の冷たさも、疼痛も全く感じなくなる。そういう心境が現れるのです。

滝に打たれて、肉体の感覚を全く消し去るようなところまで達すれば、靈感は備わるでしょう。

しかし「禅天魔」の世界ですから、心を空っぽにした隙<sup>すき</sup>に、ここぞとばかりに動物霊<sup>どうぶつれい</sup>や浮遊霊<sup>ふゆうれい</sup>などの悪霊<sup>あくりょう</sup>がその人物の意識に入り込む危険性があります。

その人物の心根<sup>しんこん</sup>・想念<sup>そうねん</sup>が悪の世界と相通<sup>あいつう</sup>ずる心持ちであれば、悪霊がその人の意識に入り込みます。

そうすると、四次元の世界の者たちですから、三次元に住む私たちの思いなどを見透<sup>みす</sup>かします。

それらの悪霊は「わたしは守護霊<sup>しゅごれい</sup>・指導霊<sup>しどうれい</sup>だ」とか、いようになるでしょうし、“我は神<sup>われ</sup>なり”<sup>かみ</sup>”といいつのる悪霊もでてくるわけです。

それは滝行<sup>たきぎょう</sup>でなくても、瞑想<sup>めいそう</sup>して肉体の感覚を無にできるほどに禅定<sup>ぜんじょう</sup>すればおなじことで、その人の心根<sup>こころね</sup>に相等しい<sup>あいひと</sup>霊が入って来ます。その人の心根<sup>こころね</sup>が汚れていれば、自らの想念が悪霊を呼び込んでしまう危険がありますので、注意が必要です。

〔たとえば〕病気とか交通事故で、その人物が生死の境をさ迷ったときに、死んだ自分の親とか、ご先祖様に逢ったとか、幽体離脱してあっちこっちへ行って、さまざまなことを見てきた。とおっしゃる方もおられます。それはあり得るのです。

『天極星』 靈魂は生と死の狭間<sup>はざま</sup>を“さ迷って” いるわけです。

意識は肉体を離れ、魂だけが世俗の外<sup>ふゆう</sup>を浮遊できます。自分の次元（空間の広がり）よりも、高次元の世界を浮遊することはできませんが、肉体があると行けない所でも、瞬時に行ける（瞬間移動）が起こるわけです。

それゆえ“死にそうな経験”をしたりすると、靈感が湧<sup>わ</sup>くということはありません。

「なんでわかったのかなあ」といっても、そこに理由の存在はないのです。

共通体験はできませんから、他人<sup>ひと</sup>はわからないのです。靈感は理性ではないので、論理的な説明がつかないわけです。

⇒ 算命学は「気」の学問です。

算命学は感性に左右されずに、理性で物事を判断していく学問です。

靈感とは反対になります。

算命学は理論がありまして「こういう生き方をしたらこうなりますよ」と、その過程<sup>こうさつ</sup>を考察するものです。

参考：考察〔よく道理を考えて物事を明らかにすること〕

〔物事の本質や状態などを明らかにするために、調べたり考えたりすること〕

参考：道理〔物事のそうあるべきすじみち。ことわり〕

その代わりに、算命的な『感』が備わります。

鑑定依頼者の話を聞いただけで、その人物の生年月日から宿命を出さなくても、この人はこのような人生になって行くであろう。とわかるようになって行くわけです。

最終的には、生年月日から表出した宿命をつかわずにその人物は、こういう結婚をして、男の子が何人生れて、女の子が何人生れて、親と住んでいるか、住んでいないか、そういった事とか、その人物の具体的な生き方から、人生はこのようになっていくと、占えるようになります。

ただし、必ず宿命は出さなくてはいけません。

なぜなら、その人の話が本当であるかどうかの判断は宿命を観ないとわかりません。

その人の話したことが、その人の宿命にあっているかどうかは、宿命を観ないとはっきりとわかりません。

宿命は嘘<sup>うそ</sup>をつきませんが、人間はどなたでも、自己<sup>じこ</sup>を保存<sup>ほぞん</sup>（自分を守ろうとする）する気持ちがありますから、自分のことをよく見られるように表現します。

そして、相手のある場合には、相手の人物のことについては、正しく評価しないという場合が多々あります。でも、その人に関係している相手側の人たちの宿命があれば、さまざまな事柄（人間関係を含めて）の判定はできません

参考：自己保存〔生物が自己の生命を守り発展させようとすること〕

『天極星』は「肉体が無<sup>む</sup>」「精神<sup>ゆう</sup>だけ有」です。そういう状態は、人間が死にかけてはいなくても経験しています。

皆様は日常的に体験しています。

それは寝ているときです。

夢を観ているときは、肉体の感覚はないはずです。

肉体の感覚がなくても、現実の世界のように感じられます。

人間が眠ってエネルギーを補給しているときは、肉体の活動は停止していますが、精神だけは自由に移動・

活動しています。

肉体が無になると、精神は自由に動きまわることが出来ますが、その人の心の示現じげんに比例した範囲です。

参考：示現〔ある現象が現れること〕

夢のなかに死んだ人が出て来たり、何十年前の自分がでてきたり、夢のなかには、自分と想えるさまざまな姿が現れたり、何十年も会っていない人物が出て来たり、そういうことも有り得るわけです。

まさに、時間を超越している世界です。

しかし、その夢が正しいとは決まっていません。

夢で観たことが現実になる正夢まさゆめもありますが、とんでもない夢もあるわけです。

すべての夢が現実になるわけではないのです。

肉体が活動を停止して、精神だけが自由に動きまわるものですから、とんでもない場所に行くとか、現実とはかけ離れたことが夢のなかに出て来た。ということも有り得るわけです。

『天極星』は自由な発想ができます。といたしました。  
自由な発想を思い浮かべるのは、天極星の良さでもあるのです。しかし自由で常識にとらわれないということは、ふつうの知識・判断力と、大きな<sup>へだ</sup>隔たりのある考え方をする傾向があります。  
つまり、実際の事実、状態とかけ離れた考え方をする可能性がある星なのです。

現実とかけ離れた考えをする可能性がある。



精神不安定な星

この部分は、天極星をもっている人の精神が不安定な質でもあります。

これも天極星の1つの特徴です。

天極星をもっている人は、悪く出ると精神不安定な人になってしまう傾向をもちます。

このことを順番に説明します。➡

天極星はこの世の人ではなくて、死んだ後の時代です。  
肉体と精神とに分けますと、肉体は現実です。

肉体 ⇒ 無〔現実〕

精神 ⇒ 有

肉体を現実というふうに置き換えることができます。  
すでに肉体はないので、現実には存在しないのです。  
精神だけになっている星ですから、現実にはこだわらない  
考え方ができます。

現実にはこだわらない考えができる。



情にふりまわされない。

言葉を換えれば、情に振り回されない人ともいえます。  
死後の時代は、この世で生きる生活とは違いますから、  
現実性としての情け・意地・感情などに、振りまわされ  
ることなく、物事の判断ができる人です。  
それが天極星のよさでもあります。

さきほど、天極星は精神不安定な星でもありと書きましたが、天極星の人は現実の物事に執着をしないほうが、頭もよくなり、感も<sup>さ</sup>冴えくるし、星のよさが出てきます。此の世で役立つお金も、彼の世という死後の世界では役に立ちません。

現実的なことに執着しないほうが天極星のよさが出る。

死者が七日目に渡る、冥土<sup>めいど</sup>への途中にある「三途の川」を、札束や宝石を入れたバックを抱えて渡ろうとしても、生前の業(ごう)と執着によって、渡る場所も異なるし、死人の衣<sup>ころも</sup>を奪<sup>う</sup>ばうという奪衣婆<sup>だつえば</sup>と懸衣翁<sup>けんえおう</sup>にすべて奪われてしまっていますから、死者は魂だけです。とても身軽です。

「精神的に強い」「感が鋭い」と言っていますように、頭がいいし、感性の鋭い星です。

この世の現実的な事柄に執着しないほうが星の良さがでます。

『天極星』が精神不安定になるのは、現実の物事が、心に引っ掛かって、それに思い入れをしたときです。

現実的なことに気持ちごととられると精神不安定になる。

死んだ人の魂がこの世に未練（執着）を残していると、なかなか成仏できなくて非常に苦しみます。といたりします。

それと似たようなことが天極星をもつ人に起こります。現実<sup>に</sup>にこだわると、たいへん神経質な人になります。

他人<sup>ひと</sup>からみれば、どうでもいいこと、忘れて当たり前と思えるようなことに囚<sup>とら</sup>われてしまい、神経質・精神不安定に陥ります。

神経質 ⇒ 他人<sup>ひと</sup>から見ればどうでもいいのに、気にし続ける。このような質が出ていたら、ダメな天極星です。

すすっと心がうごく、感覚が鋭敏なので、些細<sup>ささい</sup>な部分（気にしなくてもいい部分）が、とても気になるのです。

とても神経質になって、あげくのはては精神不安定になりますし、運勢も下がっていくようになります。

そうなると星は輝<sup>かがや</sup>きを失います。

『天極星』は死人ですから、この世に執着してはいけません。すでに死んだ時代です。

死んだらどうしようと、考える必要はないですね。

『私はこの世には何の未練もありません。何時死んでもいいです』 その心境で生きると星が輝きます。

現実の物事に執着するようになると、精神が不安定になって実力をだせません。運勢も伸びません。

天極星は現実世界の星ではないのです。  
このことを忘れないでください。

【天極星】 終わります。

☞ 天庫星（てんくらせい）      正式名称（てんこせい）

## 天庫星 — 入墓

|

### 成仏する時代

天庫星は入墓の星です。

成仏する時代と考えていただくとよろしいです。

天庫星には〔長男の星〕〔後継ぎの星〕という意味もあります。それについては後で説明します。

☞ 天庫星の性格的な特徴から説明します。

性格的な特徴は『天極星・死人の星』と比べるとわかりやすいです。

・天極星は此の世と彼の世の間を、魂が彷徨っていた時代です。

・天庫星の時代は入墓の星です。成仏しました。

れいこん あ よ  
霊魂は彼の世に到着して成仏しましたから、天庫星は精神が安定している星です。

精神安定

魂が抜けた肉体は墓場はかばに埋められて墓標ぼひょうが立ちます。  
あるいは、火葬場で焼かれた遺骨はお墓に納骨されます。

【天庫星】入墓した星ですから、成仏して精神が安定した星です。

精神が安定——その意味で「自分はいま目的をもっていて、集中してやりたい事柄があるから、精神を集中させて取り組みたい」

「じっくり腰を落ち着けて、真剣に事にあたりたい」  
そういう質を有する星です。

それゆえ、物事に対して『凝り性こしょう』になります。  
言葉を換えれば、研究熱心な人です。

凝り性・研究熱心。

参考・凝り性 [物事に熱中して、満足するまでやりとおす性質]

なにかに心が引かれると、じっくり腰を落ち着けて、それを調べたい。そういう質をもっています。

気が向いて何かをはじめると、満足するまで徹底的にやろうとします。仕事でもそうなのです。

そのような姿で物事に取り組みますから、すぐに行動に移さないともいえます。

天庫星はじっくり腰を落ち着けて、物事をやるのが、性格に合っています。

“腰が重い”といえるでしょう。

興味のあることをじっくり観察するとか、人に訊いたりして、念入りに調べたいのです。

そのような特質を発揮すると、天庫星の人は伸びます。

**仕事も1つのことに時間をかけてやるほうが伸びる。**

お墓に遺骨を埋葬してもらおうことで、魂が安定するという意味で、精神が安定している星です。

☞ 算命学はお墓の必要性を説きます。

☞ 中庸学は「お墓に<sup>れいこん</sup>霊魂は<sup>やど</sup>宿らない（墓に入らない）」として、お墓の必要性を論じません。肉体は朽<sup>く</sup>ちて地へもどります。

<sup>げんせ</sup>現世（此の世）の役目・修行を終えた霊魂であれば、その霊魂に相応した<sup>あ の よ</sup>彼の世の<sup>じげん</sup>次元へと旅立ちます。

以前より高次元の世界へ<sup>むか</sup>迎え入れられる<sup>たましい</sup>魂もおりますし、より低次元の世界へ<sup>たましい</sup>落ちて行く魂も存在します。

それは現世（此の世）の生き様によって決まります。

天国と地獄という言葉がありますように、<sup>てんかい</sup>天界へ向かう霊魂もいれば、地獄界へ落ちて行く霊魂も存在します。

肉体は此の世の役目・修行に必要な『<sup>ふね</sup>舟』に過ぎません。

朽<sup>く</sup>ちた<sup>ふね</sup>舟にお墓は必要ないのです。

どちらの説に関心を寄せるのかは、ご自身の考え方です。

〔霊魂が落ち着く〕という意味においては、中庸学も算命学もおなじです。

☞ 『天庫星』にもどります。

〔たとえば〕会社であれば、天庫星をもつ人は転勤の多い会社には向きません。

あっちこっちへ転勤させられると、環境も変化しますし、人間関係も変わります。

そうになると、天庫星がもつ資質をだせなくなってしまう。

天庫星をもつ人が頻<sup>ひんばん</sup>に引っ越しをする。

天庫星をもつ人が転々と仕事変える。

その生き方をしている人物がいるとすれば、その人の運勢は伸びないと思ってよいのです。

☞ 『天庫星』のものの考え方は「本筋を通す」とか、ひとつの主義・考え方を貫き通そうとします。

筋を通す。1つの考え、主義を貫き通そうとする。

本質的に「道理が適<sup>かな</sup>うようにする」「筋を立てる」という考え方をする星ですから、他人が発する意見に対しても、〔しかるべき手続きを踏んでいない〕〔筋が通らない〕

と言って、憤慨<sup>ふんがい</sup>したり、不満に思ったりすることも多くなります。

参考・本質的〔本来備わっているさま〕

参考・憤慨〔不正・不当なことについて、ひどく怒ること〕

⇒ 天庫星をもつ子供は、主義を貫き通そうとする質をもちます。小さい頃から現実的な目標を子供に与えてあげると、それに向かって真っ直ぐに進もうとします。

子供は自分で物事の是非<sup>ぜ ひ</sup>は決めることができません。そこは親御さんがよくよく観察して、その子供の資質を見抜いて助言を与えたりすることで、子供がもっている本来の質を伸ばしてあげるとよいのです。

そして、「早く、早くしなさい」と、子供を焦<sup>あせ</sup>らせることをしてはいけないのです。

天庫星の質に反します。

〔たとえば〕「学校の先生になりたい」といったら、〇〇ちゃんが先生になるには、こういう勉強が必要だとか、こういう経験もしておくほうがよいとか、助言

を与えると、それに向かって真っ直ぐに進んで行くようになります。

天庫星の本質はそうなのですが、子供は未熟ですから、自分自身でその判断できないのです。

将来「学者になりたい」と子供がいったとします。

ひとつの〔例〕ということでもうしあげます。

なにか物事を探究する学者に向いているのでは——と想ったら、親御さんが『学者になるには、このようにしたらよいという目標』をその子に与えてあげると、この子は真っ直ぐそこに向かって、進もうとするでしょう。

あるいは、自分の家が商売をやっているのであれば、「○○ちゃんも商売やったらいいんじゃない」と子供にいったのであれば、親御さんがその方向づけを与えることで、その子供は商売・商人に向かって真っ直ぐ進んでいくようになります。

☞ 商人に向いているのかどうかは、宿命を観ないとわかりませんよ。学者に向くのかは、宿命を観ないとわかりせん。

ここでは『天庫星』本来の資質を申しあげていますが、何か目標を設定したのであれば、親御さんが現実的な目標を与えてあげるとよいわけです。

現実的な目標として、具体的に「こういう仕事は……」  
「このよ。と教えてあげるとよいのです。

「これだけ努力すればその仕事をやれるのよ」というよりは、現実的な目標を与えてあげるとよいのです。

しかし、親御さんのほうが、いきあたりばったりで、

「子供がいったから、その場のなりゆきで言ったのよ」  
そのような思い付きはダメです。

ご自分が言ったことを後<sup>あと</sup>になって撤回するような目標はマイナスになります。

このあいだは「商人になるといいって言っていたのに」  
今年になったら「公務員のほうがいい」そんなことを親が言い出したとしたら、「じゃあ、なにすればいいのよ」と、いうことになってしまいます。

そのようなことでは、その子の精神が<sup>さくらん</sup>錯乱するようになってしまって、結局は伸びなくなります。

参考：錯乱〔思考や感情などが混乱して、異常な状態におちいること〕

このことについては、大人であってもおなじです。  
大人だったら、親に与えてもらわなくても、自分で、  
現実的な目標を立てるとよいのです。  
その目標がコロコロ変るようではマイナスです。

☞ ここは大切なところです。

天庫星には“長男の役目”とか“家系に対する役目”  
そういった意味合いがあります。

『天庫星』は成仏する時代、お墓に入る時代の星です  
から、『人間の生涯の過程において、最も先祖とかかわ  
りが深くなる』密接な関係となる時代なのです。

そうおもえる時代を想定しますと、

**先祖と最もかかわりの深い時代の星。**

お墓に埋葬される時代ということは、

〔たとえば〕丸山 A さんには、代々・丸山家のお墓が  
あります。そこには丸山家の先祖が葬ほうむられています。  
丸山 A さんが死ぬと、先祖とおなじお墓に入るよう  
になります。とうぜんですが、先祖と A さんのかかわり  
は深くなります。

此の世と彼の世ということで考えても、自分より先祖のほうが先に死んでいます。

人間が死んで——此の世から彼の世へと行く過程で、すんなりと成仏できた先祖ばかりではないでしょう。多くの先祖が通った道とおなじような途<sup>みち</sup>を彷徨って、彼の世にたどり着けば成仏できます。

彼の世で成仏したといっても、そこで先祖と出会えるのかどうかわかりませんが、少なくとも此の世にいる時代よりは、彼の世へ行き着いて成仏した時代のほうが、先祖との関わり<sup>かか</sup>が深くなります。

それゆえ、すべての『十二大従星』なかで『天庫星』は、先祖との関わりが最も深い時代という意味があります。

☞ 『天庫星』は先祖との関わりが最も深い時代の星ですが、先祖との関わりに焦点を絞って、此の世で生活している人間に置き換えて考えます。

一家の内<sup>うち</sup>で先祖と最もかかわりの深い人物は誰かといえ、家督<sup>かどく</sup>を継ぐ『長男』『跡継ぎ』<sup>あとつ</sup>です。

参考：家督〔その家の跡を継ぐ人（継嗣けいし）。狭義では長男を指す〕

一家の子供たちの内<sup>うち</sup>で、長男が家を継ぎましたので、家を継がない人たちが家から出て行くと、家を出た人たちは、此の世での先祖とのかかわりは薄<sup>うす</sup>くなります。

〔たとえば〕古田家<sup>うち</sup>の内<sup>うち</sup>で、B という人物は家を出ないで、古田家を継げば、先祖が代々残してきた家系を継ぐことになりますから、B は先祖と最もかかわりが深い生き方をするようになるはずです。

その意味で、天庫星は先祖と最もかかわりの深い時代の星ということで、『長男の星』『跡継ぎ<sup>あとつ</sup>の星<sup>ほし</sup>』といわれています。

天庫星	}	長男の星
		跡継ぎの星

長男に生れるとか、跡継ぎに生れたら、その家の先祖の残したことを受け継ぐでしょうし、先祖代々のお墓を守って行くようになります。

お墓・財産だけでなく、先祖が代々伝えてきた生き方・家風など無形の様式も受け継ぐようになるでしょう。

それゆえ、天庫星は『長男の星』『跡継ぎあとつの星』という  
意味があります。

☞ この部分は誤解を招きまねやすいです。

〔長男はみんな天庫星をもっている〕とか〔天庫星をもつて  
いて必ず長男に生れる〕そんなことはありません。  
長男で生まれて来るとは限りません。

天庫星をもつて女の子に生まれる場合もありますし、  
次男に生れる、三男に生れるとかもあるわけです。

「次男なのに天庫星をもつているのはおかしい？」と  
思う人もおられます。

そこで『天庫星』をもつ人を占うときは〔長男の場合〕  
〔次男の場合〕〔女の子に生まれた場合〕を分けて考え  
ます。

個々の状況によって、観方を変えていきます。

☞ 長男に生まれて『天庫星』をもつ宿命の場合です。長男が跡継ぎの星をもっていますから、当然ですが、一家の跡継ぎになります。

長男が家系を継ぐと、本人の宿命も家運も安定する。

長男に生まれて、天庫星をもっていて家系を継ぐと、この人は宿命どおりです。

宿命のとおり生きなさいということになります。

天庫星をもつ長男が家系を継ぐと、長男の宿命が活きてきます。本人の宿命は安定します。

家を継ぐべき人が継いだわけですから、天庫星の長男が継いだ家は栄えます。

天庫星の長男が継いだ家は栄えるといっても〔どれほど栄えるのか〕については、天庫星だけではいえないのです。それは宿命にあるほかの干支も影響してくるからです。

「家系がどれほど栄えるのか」という程度は問えませんが、家系が栄えるとおもって結構です。

いちぶ  
一部の家系だけに限らず「家運が安定」します。

『天庫星』の長男が生まれたのに、長男に出て行かれたら、その家系は衰退していくようになります。

天庫星をもつ長男が生まれているのに〔その長男を<sup>しりぞ</sup>退けるような状況にする〕という意味も含まれます。

参考：退ける〔ひきさがらせる〕〔追いやる〕

親が長男を嫌って受け入れなければ、当然ですがその家系は衰退してゆきます。

天庫星をもつ長男が勝手に家から出てしまうこともあるでしょう。

天庫星の長男に出て行かれた家は衰退してゆきます。

天庫星の長男が家を出て行ったのなら、次男がいても、その家は継がないほうが賢明です。

衰退していく家を継ぐ次男がかawaiiそうです。

天庫星の長男が出て行った<sup>あと</sup>後、代わりに次男が継いだとか、三男が継いだとか、娘がお婿さんもらって継いだとか、そのようにして継いでも、衰退してゆくようになります。

☞ その家を継いだ人物の宿命によっては、家系の衰退を少しだけ食い止めることができる場合もありますし、どんどん衰退させる場合もあります。

それは跡を継いだ人物の宿命によります。

たとえ衰退する過程を少し食い止めることができたとしても、天庫星をもっている長男が出て行ったことによって衰退する。それは決まってしまうのです。

天庫星をもつて生まれてきた長男がいるのであれば、その長男が跡を継がないと家系は衰退していきます。このことは『一族すべての人達の運が衰退していく』という意味も加わります。

その結果の <sup>わざわい</sup>禍 がでるのは、遅くとも孫の代には出てくると考えています。

☞ その家系の長男が天庫星をもつていて、跡を継げばよい影響を家系に及ぼします。

長男が跡取りをすると全てが安定します。

どういうことなのかといえは——家系から恩恵を受けるのは、家を継いだ長男だけではないのです。

一族すべての人達が恩恵を受けます。

それゆえ、長男が天庫星をもっているのであれば、  
ここまで申しあげた事柄を当てはめて考えるとよいで  
しょう。

「本人はどうなるのか——」

「家運はどうなるのか——」

当事者の人たちがお決めになることです。

☞ 次男に生まれて『天庫星』をもつ宿命の場合です。  
すこし難しいですが、天庫星をもっているのが次男の場合、  
三男の場合、そして四男の場合も含まれます。

次男が天庫星をもっている場合は、次男が後<sup>あと</sup>を取<sup>と</sup>ると  
いうことでは、『初代』になればよいのです。

初代とは自分が新しく家系をつくるという意味です。

宿命（1）初代とは

両親（父と母がいます） ⇒

父 ———— 母  
|

①長男

|

②次男

宿命（2）②次男

②の次男は家を出て➡

➡結婚して父と母になりました

次男

父 ———— 母  
|

長男①が生まれました

この長男①に跡を継がせることで、

②の次男は「初代」になります。

次男の跡継ぎとして、長男①が跡を継がないと次男の初代の意味はなくなる。

次男の跡継ぎとして、次男の長男①が跡を継がないと、次男の『初代』と意味はなくなります。

次男がせっかく新しい家系をつくって初代になっても、その後を継ぐ人物がいなければ、初代の意味はないのです。

宿命（1）初代とは においては 宿命（2）②次男 の次男を

〔例え〕にしていますけど、この話は三男も四男も含まれます。次男以下（三男）（四男）の場合もおなじです。

次男は自分の代で新しい家系を興して、自分の長男に後を継がせることです。

〔例え〕にした次男の場合、長男①が跡継ぎになれば、次男の家系は伸びていきますが、長男①が家系を継がない場合は次男が新しくつくった家系の初代という意味はなくなります。

そうしますと、次男の家に生まれた長男①が天庫星をもっていないということもあるわけです。

天庫星をもっているとは限りません。

天庫星をもっていないけど、跡を継がせるということもあり得ます。

その場合、長男①は自分が天庫星をもっていないので

苦しむことになりますけど、家系はつながります。

これは仕方ないのです。

(苦しむことになる)その意味は、天庫星があれば長男の役目の星ですから、それが当たり前という感覚です。

しかし、長男①は自分が天庫星をもっていません。天庫星をもっていない心持ちとしては「なんで自分が継ぐの……」

「なんで自分が継がなければならないの……」という感覚にとらわれることになるかも知れないからです。

次男以下（三男）（四男）の場合は、自分の代で新たな家系を興して、自分の長男に自分の跡を継がせること。

**宿命（2）②次男** とおなじように、自分が新たな家系を興して初代となり、自分の長男に自分の跡を継がせることで、[次男に生まれただけど天庫星がもっている] という意味合いを消化したことになるのです。

次男の自分が天庫星をもっている宿命を消化したことになります。

それは自分が新しく興した家系に満ち足りて十分だと感じるまでにいかないまでも、少なくとも次男本人の宿命は安定しますし、通常は家運も栄えます。

それゆえ、次男に生まれて天庫星をもつ人は、実家を出て、自分の家系を興しなさいということです。

新しい家系を興して、自分が初代になったら、自分の長男に必ず後を継がせないと駄目なのです。

ということは、まずは何といたっても男の子が生まれないと駄目ですね。

なぜダメなのかといえれば——男子が産まれなければ、長男に跡を継がせたことにならないからです。

妻に男の子を産んでもらい、生まれて来た長男に継がせることです。

それができれば、次男が独立して興した家系は栄えていきますし、家系が続いてゆくようになります。

そのようにできればよいのですが、できない場合には家系が栄える。家系が続く。とはならないのです。

☞ いままでご説明しましたのは、天庫星をもつ長男と天庫星をもった次男以下の話だけですよ。

そして、宿命に天庫星をもっている場合に限りです。

天庫星のない宿命はこの限りではありません。

それ以外の宿命については——後に出てきます。

長男であっても「絶対に跡を継いではいけません」という宿命もあります。もう少し先に出てきます。

ここまでは男性の場合です。

女性は含まれていません。

☞ 女性に生まれて『天庫星』をもつ宿命の場合です。

① 長男のところに嫁ぎ、その夫に長男の役目をさせること。

女性が宿命に『天庫星』をもっています。

「長男の嫁になりなさい」ということです。

天庫星をもつ女性が、天庫星をもたない長男と結婚することで、夫に長男としての役目を果たさせることができます。

天庫星をもっていない長男でも、妻が天庫星をもっていれば、長男が跡継ぎしたことになります。

天庫星をもっていない夫でも長男ですから、長男としての役目を果たしていかなければ、天庫星をもつ妻の存在があっても意味がないですよ。

「跡を継ぐ」「後を継ぐ」というのは、墓を守ることも含まれますが、長男が両親と一緒に暮らすことです。

長男が両親と一緒に暮らす〔この場合は父方です〕  
両親が離婚した場合でも、父親が中心になります。  
そこには男と女の役目の違いがあるからです。上級で学びます。

宿命に天庫星をもっていない長男のところへ、天庫星  
をもっている女性が嫁ぐわけです。

ここでの意味は——天庫星をもっている妻が、天庫星  
をもたない長男（夫）に、長男としての役目を果たさ  
せなさい。ということです。

天庫星をもつ妻の役割は、夫に長男としての役目をさ  
せることです。それができれば天庫星をもっていない  
夫の宿命も家系も安定します。

そうなれば嫁いだ女性も安定します。

このように女性の場合は、すこし融通が利きます。

宿命に天庫星をもつ女性は、天庫星をもっていない長男のと  
ころへ嫁いで、その夫に長男の役目をさせることです。

これが1番のおすすめです。1番いいですよ。

☞ 『天庫星』をもつ宿命の女性が、次男、または三男と結婚した場合は、（つまり次男以下と結婚した場合は）

② 天庫星をもつ女性と結婚した夫に、初代として家系を興しおこてもらい、次ぎの（二代目）になる長男に跡を継がせること。

『天庫星』をもつ女性が、長男以外に嫁いだ場合は、結婚した男性と一緒に男性の家系から出て、初代になることです。

初代になるというのは、自分の夫を初代にさせることです。

『天庫星』をもつ女性が、**Ⓐ**家の三男に嫁いだ場合は、三男と一緒に**Ⓐ**家を出ます。つぎに**Ⓐ**家を出た三男には、初代としての家系を興してもらうのです。そして二人のあいだに生まれた長男に跡を継がせます。

三男と結婚した天庫星をもつ妻は、跡継ぎになる男子を産まなければならないのです。

②のつぎに——もう1つの方法③があります。➡

③ 天庫星をもつ女性が——親の跡を継いだ場合です。

『天庫星』を宿命にもつ女性が親の跡を継ぎました。  
その女性は養子をもらうことができます。  
つまり『婿養子』です。夫は養子になります。  
天庫星の女性が自分の家を継いで、夫になった(婿養子)  
に『家長の役目』の役目を果た<sup>は</sup>してもらうのです。  
ただし、その夫の宿命に『養子運の星』が必要です。  
女性が婿養子をもらうわけですから、婿に来る夫自体  
に『養子運』が必要になります。

代表的な養子運の星は『天印星』<sup>てんいんせい</sup>です。  
それゆえ、婿として来る相手の星をよく観て(養子に)  
もらうことです。養子運の星をもっていないと、婿に  
入った男性が苦勞することになります。  
女性自身は宿命どおりでも、婿になる男性に養子運の  
星がなければ、その男性は宿命どおりではないのです。

☞ 養子運の星は『天印星』だけではありません。

ほかにも出てきます。

このように、女性はある程度の融通が利きます。

☞ ①②③のいずれでもない場合を<sup>あ</sup>挙げます。

〔たとえば〕次男と結婚したのに「自分たちのあいだに生まれた子供に跡を継がせたい」そうになったときには、この家系は続かなくなります。

①②③のいずれにも該当しなければ、宿命は<sup>い</sup>生きてこないし、家系の家運もその後に衰退するようになります。

それゆえ『天庫星』もっている人がいたら、その人物が生きてきた具体的なあり方（生き方の様子）をよくお訊きして、①②③のどれかに<sup>あ</sup>当<sup>は</sup>て嵌まっているのかを観る必要があります。

そうすることで、〔この家は伸びる〕〔この家はダメ〕とかを観ることができます。

各自がそれぞれの役目をきちんと果たすことで、その家系は伸びて行きます。

家系が伸びるということは、子供の伸びも良いということなのです。

家系が伸びる ⇒ 子供の伸びもよい。

『天庫星』をもっている人たちの家系がすべて栄えてしまうと大変なことになります。

それゆえ〔栄えることなく〕その人物一代で終わる。  
という人もたくさんいます。  
それで当たり前なのです。

言い換えれば、代々栄えて行く家系をつくれる人物は少ないということです。

「栄えない」のほうが多いとおもいます。

『天庫星』 終わります。

つぎは『十二大従星』最後の星『天馳星』です。 ➡

⇒ 天馳星（てんそうせい）

天馳星 — 彼の世

『天馳星』は「彼の世の頂点の星」です。

“彼の世の頂点”といってもわかりにくいとおもいますので、此の世（現実世界）から、1 番遠くに離れている時代の星、精神性の頂点と考えるとよいでしょう。

彼の世の頂点



精神の頂点

彼の世という次元は、肉体が消滅して精神だけ残っています。参考：次元〔ある特定の領域〕

天馳星は精神の頂点 ⇒ 精神的に強い

精神 ————— 精神の頂点（精神性が強い。その分野に強い）

肉体（現実） ———— 現実面に欠ける性格（現実から 1 番離れている）

精神の頂点ですから、精神に関する事象に強い星です。  
此の世（現実）の時代から見ると、1番遠く隔たる時代  
です。参考：事象〔いろいろの物事や現象〕

現実世界と大きな違いがあり、精神世界という位置に  
存在する星です。参考：隔たる〔時間的・空間的に遠く離れる〕

この世の現実からは遠くかけ離れた時代。



冷静な判断ができる。

此の世の現実からは、遙かに遠く隔たる時代です。  
物事を見るときに「遠くから全体を見渡す」そのよう  
に第三者的な見方ができます。

自分のことでも自分という存在から離れて、第三者的  
な立場で、他人事のように冷静な判断ができます。

四圍の変化する事象を遠い世界にしながら、ゆったり  
と、じっと眼をそらさずに観る感性をもちます。

彼の世の頂点ですから、此の世での現実的な情にとら  
われないで、現実面には無関係だというような感覚を  
備えています。情理・慈愛を重んじます。

参考：精神的〔精神にかんする事を重んじる〕⇔物質的・肉体的

参考：情理〔相手の気持ちをくみ取り、ものごとのすじみちを立てる〕

参考：くみ取る〔表面に現れない事柄を推察して理解する〕

参考：慈愛〔親が子供をいつくしむような深い愛〕

参考：執着〔心が強くひかれること。深く思い込むこと〕

【天馳星】の生き方は現実的なささいなことを気にしない・気をつかわない、何かをするときは現実の状況に執着しゅうちやくしない生き方がよいのですが、その質は冷たい人にも見られやすいのです。

〔たとえば〕嬉しいことがあれば、もちろん嬉しいのですが、素直に感情をだして、心の底から喜べない冷めたところがあります。

悲しいこと……悲しいのでしょうけど、他人事のような感覚をもてます。

その内に入り込むことなく、一歩しりぞ退いて第三者の眼でとらえることができます。

そのような冷めた面があると考えていただければよいでしょう。

彼の世の頂点なので、現実から遠くかけ離れています。

その意味で現実という枠（仕切り）をもちません。

此の世という現世で生きているときは、嫌でも現実的な制約に縛られて、何事も限界があるはずです。

参考・制約〔条件を課して自由に活動させないこと〕

参考・限界〔これ以上の先は無いというぎりぎりの境〕

〔たとえば〕24時間という1日の条件を度外視して、何日も寝ないで、休まないで働くことは不可能です。

1日の内で何時間位……しか働けません。

そういう限界が個々の人たちにあるはずです。

ところが——彼の世の星に限界はないのです。

そのような現実的な時間の枠は取り払われています。

いくなれば「念の世界」です。

「一念三千」思ったことは、瞬時に具現されます。

瞬時も存在しない速さです。

ウィキペディアに、真空中の「光速」1秒間約30万kmと記載されています。念の速度はその17倍とも記されています。

此の世の人間は肉体がありますから、肉体が可動できる範囲内のことしかできません。

彼の世は肉体の<sup>わく</sup>枠がないので、限界を超えるチカラを発揮できる可能性があると考えerわけです。

<sup>ばね</sup>撥条が跳ね返るように、<sup>しゅんぱつりょく</sup>瞬発力は最大の星です。

瞬間に大きなチカラを発揮できる

枠がなく、限界がないので、一度に最大のエネルギーと発揮することが可能です。

それゆえ、たくさんの物事を1度でこなすことも可能ですが、そのあとエネルギーは<sup>か</sup>涸れてしまいます。打ち上げ花火のように、パッと<sup>かがや</sup>輝いて、パッと<sup>ち</sup>散ってしまうため持続力に欠けます。

持続力に欠ける。

『天馳星』をもつ人は、すぐにでも片付けないといけないような仕事とか、用事があるときには、なるべく短時間で一気に集中して終える。

そういうやり方が向きます。

天馳星が集中して一度に大きなチカラを放出するとき  
は、『十二大従星』のどの星も敵かないません。

一瞬爆発的なチカラを発揮できます。

しかし、最大のチカラを使い果たした後は、しばらく  
休む必要があります。その意味で持続力に欠けます。

天馳星をもつ人は、なるべく短時間で集中して物事を  
終えてしまっ、その後しばらく休みます。

それから、また集中して一度に終えてしまっ、その  
後しばらく休んで、というように休息を取りながらや  
るほうが効率は上がります。

長い時間をかけて、ダラダラとやっていると、徐々に  
実力が低下します。

**休息を取り入れながらやる。やるときは集中すること。**

天馳星の人はそのやり方のほうが効率がよいのです。

集中してやるときには、大きなチカラが出せますから、  
一度に複数の事を行ったり、あるいは、一度に複数のこ  
とを考えたり、そういうこと出来る特異な星です。

〔たとえば〕普段でも、お食事をしながら、テレビを  
観ながら新聞を読む、そのようなことが、なんら逆ら  
うことなくできる質を備えています。

それゆえ、他人からは〔気ぜわしい〕〔落ち着きがない〕  
という風に思われます。そのように見られます。

一度にあれもこれも片づけようとして、忙しく振る舞  
っていると、すごく気ぜわしい人に見えるわけです。  
子供も落ち着きがないとおもわれます。

チカラを集中して出してしまうと、エネルギーが不足  
しますから、気力も無くなります。

チカラを集中して、発揮してしまうと、  
エネルギーも気力も無くなってしまふ。



のんびりした人、やる気のない人に見られてしまふ。

その状態を他人が見たときには、のんびりした人に見  
えてしまつて、悪くいえば、やる気のない人に見られ  
るわけです。この両面をもつのが天馳星の特徴です。

そこで……。

☞ 1度にいろいろな事をして、気ぜわしい人に見える。

その姿を①とします。

① 1度に複数のことを行うとか、1度に複数のこと考えたり  
することができる。

☞ チカラを出しきって、のんびりして、やる気がない  
ように見える。その姿を②とします。

② チカラを集中して出してしまうと、エネルギーも気力も無  
くなってしまう。

①のほうに出るのか……。

②のほうに出るのか……。

本人はコントロールできないのです。

これは天馳星のチカラの出し方の特徴といえます。

彼の世の星ですから、此の世においては、どちらの質  
を出すのか、じょうずに調整できません。

天馳星をもつ人は、やる気がないときは全くやる気が  
ないのです。

やる気になると、すごいパワーを発揮します。

それはそうなのですが、いつやる気を出すのかを自分でうまく<sup>せいぎよ</sup>制御することができないともいえます。それは天馳星をもつ人の欠点でもあるのです。

参考：制御〔目的にそって自分の思うままに調節すること〕

ほ か  
他人からみると、なにか気まぐれの人に思えるので、一緒に仕事するにしても、歩調を合わせにくい星です。

**まわりと歩調を合わせにくい。**

〔天馳星〕の人には、時間的に自由になる環境とか、制約がなく融通が利く環境が望まれます。

**時間的に自由になる、融通のきく環境のほうが伸びる。**

〔たとえば〕1日の内<sup>うち</sup>で、〔いつやってもいいです〕とか、〔気分が乗ってきたときやればいいです〕そのような環境が<sup>ふさわ</sup>相応しいです。

出社時間もある程度は融通がきく会社は、全体から見れば少ないですが、天馳星は時間的制約を受けないような会社のほうがチカラを発揮できます。

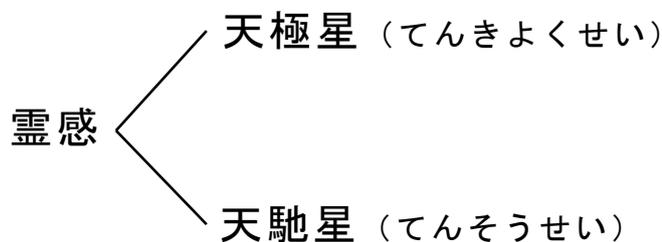
自由にペース配分できる環境に向いています。

毎日、キチッ、キチッと、何時～何時までが仕事時間です。と決められるとチカラをだせなくなってしまう星です。気分が乗ってきたときに頑張れるという環境が最適です。

彼の世の頂点の星ゆえに感受性は鋭敏です。

此の世の人では気がつかないようなことが、パッと閃いたりする感性をもちます。

『十二大従星』で靈感の要素をもっているといわれる星は【天極星・死人の星】と【天馳星・彼の世の頂点の星】の2つです。



もし、天馳星と天極星の両方をもっているとすれば、特に靈感の基因となる性質があるとして占います。

参考：感受性〔外界からの刺激を直接的に印象として、心に深く感じ取る能力〕

参考：基因〔それが要因になって、何かが起こること〕

【初年】46回目【十二大従星力学⑥】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】47回目【人体図三分法】です。